

---

# 現実

カナイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現実

### 【Zコード】

N1921E

### 【作者名】

カナイ

### 【あらすじ】

「ねえ、私たちのいるこの世界は本当に現実なのかしら」  
彼女がこう言つたのはある日の昼下がり。私の家のリビングで、彼女と、もう一人の友人と二人でお茶を飲んでいたときだつた。……  
私たちは本当に現実に在るのでしようか。

「ねえ、私たちのいるこの世界は本当に本当に現実なのかしら」  
彼女がこう言つたのはある日の昼下がり。私の家のリビングで、彼女と、もう一人の友人と三人でお茶を飲んでいたときだった。

「何のこと？」

もう一人の友人が聞いた。彼女の言葉はそれまでの話の流れとは全く関係のなさそうな話だった。

彼女はティーカップを傾けて、また元の位置に戻した。

「今、ここでお茶を飲んでいる私は本当に存在している人間なのかなどうか、つてことよ」

「訳がわからんない」

私は咳いて、もう一人の友人と顔を見合させた。お互いに彼女が言つていることの意味が分かつていてかどうかを目で問うている。彼女は自分で作つて持つてきたキャロットマースをスプーンですくいながら咳いた。

「そんな感じの本なのよ」

彼女はムースを口に含んだ。

私たちはやつと彼女が何を言つてているのかが分かつた。……気がした。

彼女は本をよく読む。私も読むけど、彼女の本へかける時間数は半端ではない。一冊の本を何度も何度も読み返し、内容について考え、飽きるまでずっとと思索を続ける。そして彼女は時折私たちに謎かけのように質問をする。

「どんな話なの？」

私が問うと、彼女は本の内容を語りだした。

その小説の主人公は小説家で、その小説は彼女が書く物語で進んでいく。

彼女の小説は必ず一人は人が死ぬ。

ある日彼女はその寸前に自分が書き上げた小説の主人公と同じ病気につかっていて、もう助からないということを知る。そして彼女は真っ白なノートに言葉をつづり始める。彼女の、本当に最後の物語として。

その物語は最後にこうくくられる。

『私は今まで、実に多くの物語の登場人物たちの運命を操ってきた。しかし、どうやら私もまた、物語の中で誰かに運命を操られる一人でしかなかつたようだ』

そこでその小説は終わる

彼女は説明を終えると、少しの間をおいた。

そして、再び口を開いた。

「その小説のあとがきにね、作者はこう書いているの。

『私もいつか、私の世界の物語の綴り手の創る運命によつて、一生を終えるのでしよう』

つて。ねえ、私たちは本当に現実に存在しているかしら？それとも、誰かの作つた物語の登場人物でしかないのかしら？

「そんなことは考えてもわかんないよ』

私は少し投げやりに答えた。

対して、もう一人の友人は少し考えてから、話し出した。

「どちらでも同じだと思う。たとえ、私たちが誰かの創つた物語の一部でも、そうでなくとも、此処が私たちにとっての現実だよ』

それつきり、私たちは二人の帰る時間までそれぞれの思考に沈んでいった。

一人が帰る時間になり、私は一人を玄関まで送つていった。

二人が靴を履くのを見ながら、口を開いた。

「さつきの話……』

二人が私のほうへ向いた。

私は少し照れながらも続けた。

「私も、私たちにとつての現実は此処なんだから、それでいいんじやないかと思う。

たとえ誰かが決めてる運命でもさ、私たちにはその未来は分からないわけでしょ？」

だつたら、それでいいよ。

それはまだ、運命が決まってないのと同じだもん

「なるほど。ご意見をどうもありがとうございます」

この話題の始まりである彼女は微笑みながら玄関の戸を開けた。  
一人を見送つて、私は扉を閉めた。

「ふう」

私はキーボードから手を離してパソコンの画面を見直した。  
そこには私の作り出した三人の登場人物の紡ぐ物語がある。  
それを見ながら私は考える。

（さて、私は物語の書き手だ。だけれど、もしかしたら私もまた、誰かに作り出された登場人物に過ぎないのかもしれない）

そんな、考え出すときりの無いことを考えながら、私は文書を保存した。

そしてパソコンの電源を切つた。

## (後書き)

この小説は宇宙について考えていた時のものなんです。

「終わりがない」と言われている宇宙ですが、それっておかしいですか。万物には終わりがあるはずです。どこまでも広がっても最終的にはどこかで終わっているはずです。でもその辺は理論とかでは説明できいたとしても、実際のところはどうなのか、宇宙で生きている私たちにもわかりません。

その辺が物語の設定外みたいなだな、と思つたんです。

私たち人間や、他の動物、地球、太陽、月、その他の星、そういうものを描いた何らかの物語に、宇宙の終わりについての設定はいらなかつたのではないかでしょうか。

私の書いた『現実』も、三人の登場人物は「私」の家のリビングでお茶をしていますが、どんなテーブルなのか、とかそういうことは一切決めていません。イメージとしてはこんな感じ、というものはあります。別に机がガラスだろうと、木だろうと、そんなことはどうでもいいんです。ただ、彼女たちがそこにいて話している。そのことが書きたかったのです。

だから、家から出た一人も、それを見送った「私」も、次の瞬間には搔き消えてなくなつてしまします。そこから次の時間は彼女たちにはありません。

宇宙もそんな感じで、私たちはある大きな物語に登場するもの一つに過ぎないかもしません。

そんなことを考えながら書きました。

小説、あとがき、ともに自分のHPにアップしているものです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1921e/>

---

現実

2011年1月16日01時08分発行